

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごごしよ

四糸金吾御書

新版
1598
ゝ
1601

四条金吾御書

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

しじようきんご

建治 4 年 ('78) 1 月 25 日

57 歳

四条金吾

たかとり

岳

ものぶ

岳

七

面

岳

飯

谷

鷹取のたけ、身延のたけ、なないたがれのたけ、いいだに

もう

き

下

萱

根

岩

うえ

ど

うえ

尋

と申し、木のもと、かやのね、いわの上、土の上、いかにたず

そうら

生

そうら

うみ

ね候えども、おいて候ところなし。されば、海にあらざ

和布

やま

茸

ほけきよう

ればわかめなし。山にあらざればくさびらなし。法華経に

ほとけ

成

道

あらざれば仏になる道なかりけるか。

そうら

うけたまわ

清

これはさておき候いぬ。なによりも承つてすずしく

そうら

幾

おん

憎

ひと

ごしゅつし

ひと

数

候ことは、いくばくの御にくまれの人の、御出仕に人かず

召具

たま

いちにちふつか

おん隙

にめしぐせられさせ給いて、一日二日ならず御ひまもなき

由　　もう

右衛門　大　夫

親

よし、うれしさ申すばかりなし。えもんのたゆうの、おやに

た　合　　かみ　　おんひとこと

返

許

との

立ちあいて上の御一言にてかえりてゆりたると、殿の

数　年　　あいだ　　憎

こぞ

冬

聞

すねんが間のにくまれ、去年のふゆはこうとききしに、か

ひび　　ごしゅつし　　おん　　供

てん

えりて日々の御出仕の御とも、いかなることぞ。ひとえに天

おんはか　　ほけきよう　　おんちから

の御計らい、法華経の御力にあらずや。

うえ　　えんぎようぼう　　きた　　そうら　　もう　　そうろう

江間

その上、円教房の来って候いしが申し候は「えまの

しろうどの　　ごしゅつし　　おん　　供　　侍　　にじゅうし　　ご　　なか

四郎殿の御出仕に御とものさぶらい二十四・五、その中に

主　　主　　背　　顔

しゅうはさておきたてまつりぬ、ぬしのせいといい、かお

魂

馬

げにん

なかつかさ

左衛門

尉

だいいち

たましい、むま・下人までも、中務のさえもんのじよう第一

男

鎌

倉

童

部

なり。あわれ、おとこや、おとこやと、かまくらわらわべは、

辻路

もう

合

そうら

語

そうろう

つじちにて申しあいて候いし」とかたり候。

怪

そうろう

こうし

きゅうしいちげん

これにつけても、あまりにあやしく候。孔子は九思一言、

しゅうこうたん

よく

とき

さんど

握

しよく

とき

さんど吐

周公旦は浴する時は三度にぎり、食する時は三度はかせ

たも

いにしえ

けんじん

いま

ひと

鏡

こんど

給う。古の賢人なり、今の人のかがみなり。されば、今度

殊

み

慎

たも

夜

はことに身をつつしませ給うべし。よるは、いかなること

ひとり

外

い

たも

かみ

おん

ありとも、一人そとへ出でさせ給うべからず。たとい上の御

召

あ

げにん

御所

遣

内

々

めし有りとも、まず下人をこそへつかわして、ないない

いちじよう

聞

定

腹

卷

着

鉢

卷

せんご

一定をききさだめて、はらまきをきて、はちまきし、先後

そう

ひと

立

しゅつし

ごしよ

傍

こころ 寄

左右に人をたてて出仕し、御所のかたわらに心よせの

館

わ

館

脱

置

参

たも

やかたか、また我がやかたかにぬぎおきて、まいらせ給う

いえ

帰

先

ひと

い

戸

脇

橋

べし。家へかえらんには、さきに人を入れて、とのわき、はし

下

厩

後

高

殿

いっさい

暗

見

のした、むまやのしり、たかどの、一切くらきところをみせ

い

焼

亡

わ

いえ

ひと

いえ

て入るべし。しようもうには、我が家よりも人の家よりも

財

惜

慌

ひ

消

あれ、たからをおしみてあわてて火をけすところへつと

寄

はし

い

しゅつし

しゅ

よるべからず。まして走り出ずることなかれ。出仕より主の

おん

供

おん

帰

とき

御

門

うま

下

御ともして御かえりの時は、みかどより馬よりおりて、

暇 差 合 由 傍 官 もう 急 帰

いとまのさしあうよし、ぼうかんに申して、いそぎかえる

かみ 仰 夜 い おん 供 ごしよ

べし。上のおおせなりとも、よに入つて御ともして御所に

久 帰 だいいちこころ 深

ひさしかるべからず。かえらんには、第一心にふかき

用 心 必 敵 窺

ようじんあるべし。ここをばかならずかたきのうかがうと

ひと 酒 給 もう 怪

ころなり。人のさけたばんと申すとも、あやしみて、ある

ことば 出 もち

いは言をいだし、あるいは用いることなかれ。

おん 弟 つね 不便 由

また御おとどもには、常はふびんのよしあるべし。つ

湯 銭 草 履 値 こころ

ねに、ゆぜに・ぞうりのあたいたんと心あるべし。「もし

こと 敵 許 わ 命

やの事のあらんには、かたきはゆるさじ、我がためにいのち

をうしなわんずる者ぞかし」とおぼして、とが失ありとも、

しょうしょうの失をばしらぬようにてあるべし。

また女少々るいは、いかなる失とがありとも、一向いっこうに御ご

きようくんまでもあるべからず。ましていさかうことなか

れ。涅槃經に云わく「罪極めて重しといえども、女人にょにんに及およぼ

さず」等云々。文の心は、いかなる失とがありとも女おうなのとが失を

おこなわざれ、これ賢人けんじんなり、これ仏弟子ぶつでしなりと申す文な

り。この文は、阿闍世王あじやせおう、父を殺すのみならず、母をあやま

たとせし時とき、耆婆ぎば・月光がっこうの両臣りようしんがいさめたる經文きようもんなり。

わ はは ころ 苦 思 りんじゅう ころ 懸
我が母、心ぐるしくおもいて臨終までも心にかけし

妹

とが

免

ふびん

はは

いもうとどもなれば、失をめんじて不便というならば、母の

ころ 安

こうよう

深

思

心やすみて孝養となるべしとふかくおぼすべし。

たにん

ふびん

況

弟

他人をも不便というぞかし。いおうや、おとうとどもを

こと

あ

いっしょ

や。もしやの事の有るには、一所にていかにもなるべし。

留

居

歎

思

出

これらこそ、とどまりいてなげかんずれば、おもいでにと

深 思

もう

たじ

すごろく

ふかくおぼすべし。かよう申すは、他事はさておきぬ、双六

ふた

いし

掛

とり

ひと

はね

飛

は二つある石はかけられず、鳥は一つの羽にてとぶことな

まさかど

貞

任

勇

将

ひとり

かな

し。将門・さだとうがようなりしゆうしようも一人は叶わ

しやていとう

こ

ろうどう

打

頼

ず。されば、舎弟等を子とも郎等ともうちたのみておわせ

ほけきよう

広

たま

よ

たま

ば、もしや法華経もひろまらせ給いて、世にもあらせ給わ

ひとかた

方人

ば、一方のかとうどたるべし。

京

内裏

いん

御所

鎌

倉

ごしよ

すでにきようのだいり、院のごそ、かまくらの御所なら

おん後

見

ごしよ

いちねん

うち

にど

しょうがつ

じゅうにがつ

びに御うしろみの御所、一年が内に二度、正月と十二月と

焼

そうら

ただごと

ほうぼう

しんごんしとう

にやけ候いぬ。これ只事にはあらず。謗法の真言師等を

おんし

侍

たも

うえ

ほけきよう

怨

そうろう

御師とたのませ給う上、かれら法華経をあだみ候 ゆえに、

てん

責

ほけきよう

じゅうらせつ

おん

諫

天のせめ、法華経・十羅刹の御いさめあるなり。かえりて

だい懺悔

辺

甚

大さんげあるならば、たすかるへんもあらんずらん。いとう

てん くに 惜 たも おお おん 諫

天のこの国をおしませ給うゆえに、大いなる御いさめある

たこく くに 打 卷 こくしゆ くにたみ うしな

か。すでに他国がこの国をうちまきて国主・国民を失わん

うえ ぶっしん じしやひやくせんまん 滅 てんげん み

上、仏神の寺社百千万がほろびんずるを、天眼をもつて見

お 歎 たも ほけきよう みな

下ろしてなげかせ給うなり。また法華經の御名をゆうゆう

者 とな ひぼうしようほう もの 脅 そうろう

たるものどもの唱うるを誹謗正法の者どもがおどし候

てん 憎 たも ゆえ ことし

を、天のにくませ給う故なり。あなかしこ、あなかしこ。今年

賢 もの ご 覧 さんかいこうし 免

かしこくして物を御らんぜよ。山海空市まぬかるるところ

行 ことし 過 あし だせんにな ほとけ う

あらば、ゆきて今年はすぎぬべし。阿私陀仙人が仏の生ま

たま み 惜

れ給いしを見て、いのちをおしみしがごとし、おしみが

きようきようきんげん

ごとし。恐々謹言。

しょうがつにじゅうごにち

正月二十五日

なかつかさのさえものじょうどの

中務左衛門尉殿

にちれん

日蓮

かおう

花押